

## 論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 (教育学)	氏名	植 田 敦 三
学位授与の要件	学位規則第4条第1・②項該当		
論 文 題 目			
作問主義算術教育の形成過程に関する研究			
論文審査担当者			
主 査 教 授 岩 崎 秀 樹			
審査委員 教 授 林 武 広			
審査委員 教 授 池 畠 良			
〔論文審査の要旨〕			
<p>本研究は、大正末期から昭和初期にかけて奈良女子高等師範学校附属小学校において精力的に実践された作問中心の算術教育に焦点を当て、わが国における作問主義算術教育の形成過程を記述することを目的としている。</p> <p>本研究の研究課題は、次の5点である。</p> <p>[研究課題1] 作問中心の算術教育が展開される以前の算術教育における作問の位置づけを明らかにする。</p> <p>[研究課題2] 作問中心の算術教育が展開されるに至った経緯とその展開および普及過程の実際を明らかにする。</p> <p>[研究課題3] 作問主義算術教育に対する批判の論点を整理し、それらへの対応過程で生じた作問主義算術教育の整備と変容の実際を明らかにする。</p> <p>[研究課題4] 教育運動ともいえる昭和初期の生活算術と作問主義算術教育とのかかわりを明らかにする。</p> <p>[研究課題5] 『尋常小学算術』（緑表紙教科書）における作問の取り扱いおよび当時の算術教育実践を明らかにする。</p> <p>本論文は、序章と終章を含めると7つの章からなり、各章を概括すると次のようになる。</p> <p>第1章において、作問中心の算術教育が展開される以前の算術教育における作問の位置を当時の新教育思潮、教授学、および国定算術教科書の特徴の観点から分析するとともに、後に作問中心の算術教育の中心的な実践者となる清水甚吾の算術教育の特質およびそこでの作問に対する姿勢を明らかにしている。この考察に基づき、第2章では、奈良女子高等師範学校附属小学校主事・木下竹次が提唱する学習法に対する回答として、清水によって展開された作問中心の算術教育の形成過程を開始時期、思想的変容、方法論的整備、開発された算術カリキュラムの構造、および普及過程について分析するとともに、実践可能性という同カリキュラムに潜在していた実践的課題について考察している。第3章では、作問中心の算術教育への批判に対して、清水が取り組んだ作問主義算術教育の実行容易化研究の過程を明らかにしている。すなわち清水の新系統案および算術学習帳の開発を精査</p>			

することで、作問主義算術教育の内的な変容を明らかにしている。第4章では、清水の実行容易化研究の中で関心を払わざるをえなかった当時の生活算術と作問主義算術教育とのかかわりを相互照射的に検討することにより、作問主義算術教育そのものの外的な変容過程について考察・検討している。第5章では、前章までの考察に基づき、作問が公的に採用された国定算術教科書『尋常小学算術』への作問主義の影響と算術教育としての継承性について分析している。終章では、作問主義算術教育の形成過程を、揺籃-発生・普及-変容（内的-外的）-継承として全体的に記述するとともに、今後に残された課題を明らかにしている。

本研究は、次の3点で高く評価できる。

- (1) 作問主義算術教育の形成過程を4つの時期に区分するとともに、それらを連関過程として捉え直す枠組みを示したこと

作問中心の算術教育に関する従来の歴史研究において看過されてきた時期、衰退期として説明されてきた時期を史料に基づき再評価することにより、作問主義算術教育の形成過程を揺籃 - 発生・普及 - 変容（内的-外的） - 継承という4つの連関過程として記述することができることを示している。これらの一連の考察を通して、作問主義算術教育と作問を公的に採用した国定算術教科書『尋常小学算術』とのかかわりを不連続な過程とする従来の言説に対して、継続的な発展過程として捉え直すことができることを示している。

- (2) 本研究を通して、作問主義算術教育に関する新たな史料を発掘するとともに、その算術教育史的意義を明らかにしていること

これまで存在が知られながらも史料として確認できていなかった史料、清水著『算術学習帳』を新たに見だし、その算術教育史的な位置づけを明らかにすることにより、『尋常小学算術』と従来の国定算術教科書との中間に位置する教材が存在したことを明らかにするとともに、『尋常小学算術』の出現に対する新たな研究の視角を与えている。

- (3) 作問主義算術教育の形成過程の記述を通して、問題設定を巡る算術科カリキュラムの開発に関するわが国の実践的経験を整理し参照可能にしたこと

問題解決を標榜するわが国の算数・数学科の授業改善にとって、問題解決と表裏の関係にある問題設定を授業にどのように位置づけるかは今日的な課題である。本研究は、この喫緊の課題に対する歴史的淵源を作問主義算術に求め、そこでのカリキュラム開発にかかわる歴史的経験を可視化している。この作業は、問題設定を巡る今日の算数・数学教育の自己吟味にとって不可欠な基盤整備である。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成27年2月18日